大学サッカーにおけるトップレベル指導者の
コーチング・メンタルモデル

和泉　隼　　森本　吉謙

キーワード：大学サッカー，トップレベル指導者，コーチング・メンタルモデル
質的研究

The mental model of
top level coaches in college football

Izumi Hayato　　Yoshikata Morimoto

Abstract

The purpose of this study is to clarify the Coaching mental model of the coaches who have top level coaching performance in college football.

As a method of this study, semi-structured interview were conducted with 3 coaches. The partially modified qualitative data analysis of Côté et al. (1993) was used for this analysis.

As a result, the coaching mental models of the 3 coaches were revealed. The coaching mental models that are common to these 3 coaches were “education of human growth” and “attitude of coach”.

Key Words：college football, top level coaches, coaching mental model, qualitative study

Ⅰ．緒言

現在、「コーチング」という言葉はスポーツのみならず、子供の教育における育児や仕事の能力を引き出すビジネスなどの世界からも注目されている。その理由を勝田(2002)は「経営資源の中で最も重視されなければならない資源は「人」であるという認識から、コーチングはその資源を育て、有効に活用するための体系化されたスキルであると考えられているからだ」と述べている。スポーツ指導の場面におけるコーチングについて、ネヴィルら(2008)は「コーチングとは競技者に対して全人教育をしつつ、積極的に競技力向上を目指すこと」とし、コーチが競技者に対し教育的アプローチから競技力向上を目指すことを述べ、また勝田(2002)は「コーチングの本質は個々人やチームの能力を引き出し、最大限に伸ばすためのあらゆる支援活動である」とし、「人を導き、人を育てる営みでもある」と述べている。

現在、日本サッカー協会が掲げる強化構想の「三位一体の強化策」という中に「指導者養成」が挙げられ、日本のサッカーの強化にはレベルの高い指導者の存在が重要であると示している。日本サッカー協会が発行する指導者ライセンスには5段階あり、上からS級・A級・B級・C級・D級の順になっている。C・D級は「12歳以下の子供・選手に関わるグラスルーツで活動する指導者の育成」、B級は「サッカーの全体像を理解し、基本的な知識・指導力を身につけた指導者の育成」、A級は「指導者のスペシャリストの育成(年代別)」、S級は「プロチームで指導できる指導者の育成」となっている。このことから年代別・レベルに合わせた質の高い指導者の存在が重要視され、指導者養成が日本サッカーの強化に欠かせないことを示している。

指導者は、選手を理解し目標達成のために常に変化していくスポーツ状況の中で瞬時に状況を捉え、選手がより良くなるための行動をすることが求められる。北村ら(2005)では「こうした状況を捉え行動を決定する枠組みは“メンタルモデル”によって説明することが可能である」と述べている。このメンタルモデルについて、ジョンソンレアード(1983)は「心の中でもつ表象(イメージ)であり、それを操作することによって問題を解決するのに使われるもの」と説明している。また、メンタルモデルは「メンタルモデルは体系性、一貫性、及び予測性といったモデルのもつ一般的な性質を有している」としている(北村ら、2005)ことから、メンタルモデルよって指導者の指導行動を捉えることにより、指導者がどのような意図や指導観を持って指導にあたっているか等の指導行動の全体が明らかとなると考えられている。このようなスポーツ指導者の指導観や理念を研究する方法として仮説生成型と言われる質的な研究方法が適していると言われている。

質的研究法とは現象の性質や特徴など数値で表すことのできないデータを扱う研究法である。Strass and Corbin(1999)は、その特徴を①統計的処理あるいは数量化のための手段によっては到達し得ない結果をもたらす、②個人の生活、できごと、行動、さらには人々の相互行為、組織の機能、社会の変動を対象とする、③様々な手段で収集されたデータから結果を導き出すために非数学的分析の手順、と説明している。また、今川(2001)は「一人ひとりに寄り添って表現をよみとる」ことを質的研究法の特徴と述べ、インタビューを通して対象者の内面性に関し、深く掘り下げると共に意図や表現を読み取ることが大切と述べている。さらに、フリック(2002)は「質的研究においては主観性も研究プロセスの一部に取り入れられるのであり、また様々な要素が具体的な文脈

から分離されることなく描写されることに大きな特徴がある」と述べ、量的研究等において重要視される客観性や再現性が必ずしも質的研究法に当てはまるわけではなく、主観性も評価基準として考慮されなければならない点を挙げている。

この質的研究法は、サッカーのコーチングにおいても応用が可能であると考えられる。先行研究(北村ら、2005；木下、2013)では、高校生や中学生の指導者を対象に質的研究を用いてメンタルモデルの研究が行われている。しかし、近年では日本のトップリーグとして位置付けられる Japan Professional Football League(以下、J リーグ)への主たる供給源となる大学生を指導する指導者を対象とした研究は見当たらない。

このことから、質的研究方法を用いた大学サッカー指導者のメンタルモデルの検討は重要な課題となる。

Ⅱ．目的

本研究は、大学サッカーにおいてトップレベルの指導実績を有する指導者を対象に、指導者がどのようなコーチング・メンタルモデルを持って指導にあたっているかを、質的研究法を用いて明らかにすることを目的とする。

Ⅲ．方法

1．データ分析方法

北村ら(2005)の方法に基づき、以下の 3 種類の組み合わせから構成されるインタビューガイドを作成し、1 対 1 の半構造化インタビューを実施した。

1) 基幹的質問：研究の目的に沿った対象者の体験や認識について幅広く回答が得られる。
2) 追跡的質問：語られたテーマ、意味、考え等についてその意味をより明確にさせる。
3) 探索的質問：語られた内容に的を絞って更に深く掘り下げる。

なお、作成した基幹的質問をメール送信し、事前に対象者に目を通してもらった。インタビューは、60 分を目処にグラウンド内のベンチやクラブハウスで行い。原則的にインタビューガイドに沿いながら行なった。インタビューの内容は対象者に許可を得た上で全て IC レコーダーに録音した。

2．対象者

先行研究（北村ら、2005）における対象者の選定条件を参考に、本研究では、以下の 4 つの条件を満たす大学サッカー部監督 3 名を対象として選定した。

1) 現役大学サッカー指導者で、かつ指導歴が 10 年以上。
2) 監督として指導にあたったチームを継続的に勝利に導いた実績をもつ（過去 10 年間に全国大会レベルの大会で 5 回以上ベスト 4 に入る）。
3) 各年代の代表選手あるいは、J リーグ選手等の優れた選手を継続的に育成・輩出している。
4) 日本サッカー協会が選出するユニバーシアード日本代表監督を務めた経験がある。

なお、これらの基準をすべて満たす指導者は全国で 5 名のみであり、本研究の対象者は、大学サッカーにおいてトップレベルの指導実績を有する指導者であるといえる。指導者 A は、47 歳男性の大学職員で指導歴は 23 年、指導者 B は、52 歳男性の大学教授で指導歴は 29 年、指導者 C は、59 歳男性の大学教授で指導歴は 36 年である。

3．データ分析

インタビューによって記録された録音音声を、研究者自身がテキスト化した後、次の 4 段階を経て分析を行なった。分析には、

Côté et al.(1993)の質的データ分析法を一部改変したものを用いた。

本研究は、インタビューを通し対象者の指導観や指導意図、指導行動等を深く読み取ること、そして指導者間の比較・検討を行いやすいものにするため、Côté et al.(1993)の方法には含まれていない新たな分析段階を「サブカテゴリー作成」と「カテゴリー概念化」の間に「カテゴリー作成」として加え、分析過程の最終段階を「カテゴリー概念化（大カテゴリー）」とした。そのため、本研究の分析は4つの段階を経て行われた。

1）標題作成

テキスト化されたインタビュー・データから、指導観、指導意図、指導行動等のコーチングに関係するものを全て抽出し、意味単位ごとに標題を付けた。

2）サブカテゴリー作成

抽出された標題を比較し、同様のもしくは相似した意味を持つものを包括できる上位語で括り、サブカテゴリーとした。

3）カテゴリー作成

サブカテゴリー同士を比較し、同様のもしくは相似した意味を持つものを包括できる上位語で括り、カテゴリーとした。

4）カテゴリー概念化(大カテゴリー)

カテゴリー同士を比較し、同様のもしくは相似した意味を持つものを包括できる上位語で括り、それらの関係性が見出せなくなるまで考査し、関係性を図に示した。

4. 結果の信頼性

本研究では質的研究において、研究対象者の選定方法やデータ収集の方法、データ分析の過程など、可能な限り詳細に記述を行った。また、インタビュー前後に練習場面や試合場面の対象者の行動を観察することで、インタビューによる会話の内容から、対象者の指導観や指導意図などをより深く読み取れるように努めた。これらによって、本研究で得られた結果の信頼性の向上に努めた。

Ⅳ. 結果及び考察

1. 指導者A

本研究の対象となる74の意味単位が得られ、「主体性」、「サッカーを通じて学ぶ」、「心のあり方」、「チーム一丸」、「指導者の学び」、「指導の姿勢」、「選手との関係」、「環境設定」の8つのカテゴリーに分類された。これらは最終的に「人間教育」、「チーム一丸」、「指導者の姿勢」、「環境設定」の4つの大カテゴリーに分類された。図1は、指導者Aのコーチング・メンタルモデルを概念化したものである。

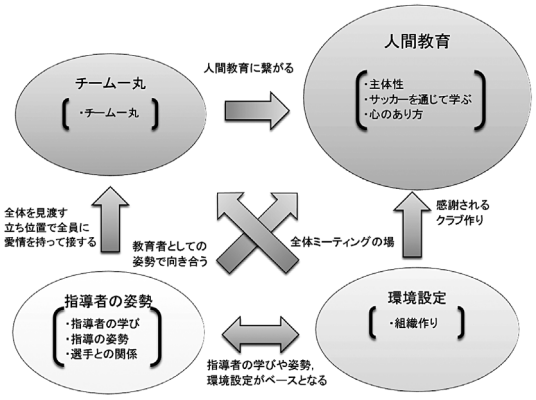

図1　指導者Aのコーチング・メンタルモデル

指導者Aは、サッカーを通じて「人間教育」を第一に考えていることが明らかとなった。自分の役割を理解しトレーニングに主体的に取り組むことや仲間と力を合わせ「チーム一丸」となって戦うことを指導し、勝つことだけではなく勝って何を得るか、サッカーを通じてどう成長するかということが社会に出たときに大切になってくると述べ、「人間教育」を行っていることが明らかとなった。また、選手達がサッカーに集中し、より高みを目指せる環境を整えることや指導者自身も学び続ける「指導者の姿勢」

が、指導者としてのベースになっていることが明らかとなった。

これらのことから指導者Ａのコーチング・メンタルモデルとして図１に示したモデルが構築された。

2. 指導者B

本研究の対象となる87の意味単位が得られ、「自立を促す」、「プロセスが大切」、「オフザボールの重要性」、「サッカーを通して学ぶ」、「仲間との関わり」、「オフザピッチの重要性」、「勝ちにこだわる」、「指導者の学び」、「心理サポート」の９つのカテゴリーに分類された。これらは最終的に「パフォーマンス向上」、「人間教育」、「指導者の姿勢」、の３つの大カテゴリーに分類された。図２は、指導者Ｂのコーチング・メンタルモデルを概念化したものである。

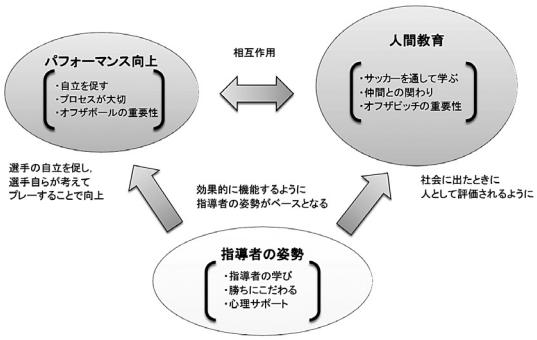

図2　指導者Bのコーチング・メンタルモデル

指導者Ｂは、選手の判断を尊重することで自立を促し、選手自らが考えてプレーしていくことで「パフォーマンス向上」に繋がることを述べている。また、仲間との関わりやオフザピッチの重要性等サッカーを通じて「人間教育」を第一に考え社会に出たときに評価される人間性を養うことが重要と考えていることが明らかとなった。そして、それらが円滑に行えるよう、選手の心理的サポートや指導者自身が学び続ける「指導者の姿勢」が重要であることが明らかとなった。

これらのことから指導者Ｂのコーチング・メンタルモデルとして図２に示したモデルが構築された。

3. 指導者C

本研究の対象となる75の意味単位が得られ、「チームコンセプトの徹底」、「サッカーを通じて学ぶ」、「即戦力を育てる」「オフザピッチの重要性」、「指導者の学び」、「選手把握」、「環境設定」の７つのカテゴリーに分類された。これらは最終的に「チーム強化」、「人間教育」、「指導者の姿勢」、「環境設定」の４つの大カテゴリーに分類された。図３は、指導者Ｃのコーチング・メンタルモデルを概念化したものである。

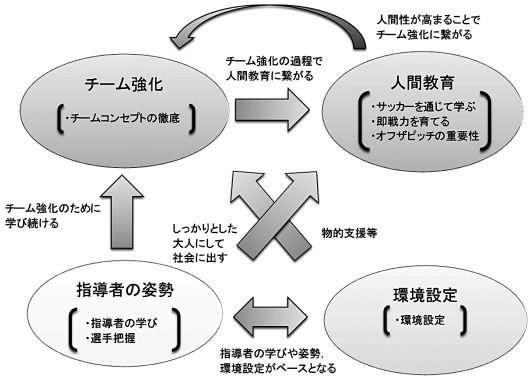

図3　指導者Cのコーチング・メンタルモデル

指導者Ｃは、指導者自身が学び続ける姿勢を持ち、チームの方向性やプレーの基準を一致させていくよう映像分析やトレーニング等を徹底的にコーディネートしていくことで「チーム強化」を行い、効果的に機能していくよう選手にとってより良い「環境設定」を行っていることが明らかとなった。そして、その中で様々な問題や課題を解決していくことで人間的に成長し、「人間教育」に繋がることを述べている。

これらのことから、指導者Ｃのコーチング・メンタルモデルとして図３に示したモデルが構築された。

4. 共通性

指導者３名のコーチング・メンタルモデルがそれぞれ構築され、その結果から３名に共通するメンタルモデルとして「人間教育」、「指導者の姿勢」が認められた。

３名の指導者は、大学卒業後は社会に出るため、そのための「人間教育」を重要視していることや選手がより成長できるよう常に目配りし、愛情を持って接すること、そして指導者自らが向上心を持ち常に学ぶ「指導者の姿勢」が、その他の大カテゴリーを効果的に機能させる可能性が示唆された。

「人間教育」、「指導者の姿勢」に関しては、育成年代を指導する指導者のコーチング・メンタルモデルを示した古賀ら(2013)、木下(2013)の研究によっても報告されている。古賀ら(2013)によって行われた研究では、Ｊリーグ・ユース指導者４名とＪリーガー輩出上位の高等学校サッカー部指導者４名のコーチング・メンタルモデルを構築した結果、 すべての指導者のモデルに「指導者の姿勢」、「人間力の向上」が共通して示された。

また、木下(2013)は、全国大会優勝、日本代表育成経験のある２名の中学校サッカー部指導者のコーチング・メンタルモデルを構築した結果、両指導者共にコーチング・メンタルモデルに「人間教育」、「選手支援」が示されている。「選手支援」においては、ブラジルのプロチームを指導する指導者のコーチング・メンタルモデルを構築した北村ら(2004)の研究によっても「支援」という言葉で報告されており、選手が合理的かつ効果的に質の高い練習に集中できるよう環境を整えることや心理的な支援をすることが重要であると述べられており、こうした指導者の関わりの重要性が報告されている。このことから、高度な競技成績を収めている指導者は指導対象の年代に関係なく、「人間教育」、「指導者の姿勢」を重要視している可能性が考えられるであろう。

Ⅴ. 結論

本研究の目的は、大学サッカーにおいてトップレベルの指導実績を有する指導者が、どのようなコーチング・メンタルモデルを持って指導にあたっているかを明らかにすることであった。その結果、指導者３名のコーチング・メンタルモデルが明らかとなり、 ３名の指導者に共通するコーチング・メンタルモデルとして「人間教育」、「指導者の姿勢」が明らかとなった。

これらのことから大学という教育機関の最終段階であり、卒業後は社会に出て生活していくことが考えられるため、サッカーだけではなく社会で評価されるような人間性を高めることに力を入れて指導していることが示唆された。また、指導者によって選手との距離感は違ってはいるものの、選手を良く観察し成長できるよう愛情を持って接していることが示され、さらに指導者自身が向上心を持ち常に学び、より高いレベルを目指し指導をすることで選手のパフォーマンス向上や人間教育に繋がることが示唆された。

Ⅵ. 参考文献

Côté, J.,Salmela, J.,Baria,A., and Russell,S. (1993) Organi zing and interpreting unstrucktured qualitative data. The Sport Psychologist June7(2) :127-137.

出口恭平・渡正(2013)Ｊリーグにおけるキャリア選択のパターンとその変容．徳山大学論叢，76:119-136.

今川恭子(2001)音楽授業研究における質的研究の理論と実際．音楽教育学，31(2, 3)：1-11.

Japan Football News http://japanfootballnews.net/(参照日 2014 年 9 月 13 日).

ジョンソンレアード, P. N. (1983)：AIUEO訳(1988)メンタルモデル－言語・推論・意味の認知科学－．産業図書.
加藤篤(2010)競技レベルの違いとコーチング・メンタルモデル－X県内高校サッカー指導者の事例研究－．スポーツ科学研究, 11:146-158.
勝田隆(2002)知的コーチングのすすめ－頂点をめざす競技者育成－．大修館書店.
木下貴博(2013)中学校サッカー部の指導者のコーチング・メンタルモデル－全国大会優勝，日本代表育成経験のある指導者の事例研究－日本コーチング学会.
北村勝朗(2004)「教育情報」の視点による「コーチング論」再考－ブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者の指導実践を対象として－．教育情報研究(2)：71-80.
北村勝朗・永山貴洋・齊藤茂(2005)優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか？－質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築－．スポーツ心理学研究(32)：17-28.
古賀康彦・堀野博幸(2013) Jリーグクラブ・ユース指導者と高等学校サッカー部指導者との指導哲学の比較．スポーツ科学研究, 10:173-182.
ネヴィルクロス・ジョンライル：川井昴訳(2008)コーチと選手のためのコーチング戦略．八千代出版.
Strass A, Corbin J(1990)：南裕子監訳(1999)質的研究の基礎：グラウンデッド・セオリーの技法と手順．医学書院.
ウヴェ・フリック：小田博志ほか訳(2002)質的研究入門「人間の科学」のための方法論．春秋社.